The Weed Science Society of Japan

雑草研究 Vol. 50 (1) 43～44 (2005)
J. Weed Sci. Tech.
資 料

除草の風土〔4〕
マレーシア・サラワクにおける湿地での稲作

市川昌広（総合地球環境学研究所）

第1図 *Scleria sumatrensis* がおいしげる草地を山刀により刈りはらう
1998年8月28日，マレーシア・サラワク州のバコン川流域の村にて筆者撮影。

マレーシア・サラワク州の低地では，数年に一度，稲の植付け場所が移される移動稲作がみられる。湿地の草木を刈りはらい，火入れ後，そこに稲を植付けるだけで，たとえ連作をしても植付けの面積や形は年によって少しずつ異なる。山の斜面でよくみられる焼畑栽培の要領で，湿地で稲作がおこなわれているといったほうがイメージしやすいかもしれない。ここでは，その稲作における植付け前の草の除き方について，筆者の既報[1-3]をもとに紹介したい。

サラワクでは，熱帯雨林気候下，豊富な雨により，大きな河川の下流には湿地が広い。その中核を占める泥炭湿地林には，人は住んでいない。先住民の村がみられるのは，比較的水はけがよい，広大な湿地の縁にあたる場所である。地形的に少し高いところに高床式のロングハウスが作られる。毎年のように川が増水してあたりは冠水するが，床上まで水がくることはめったにない。草木の生育は旺盛だから，ロングハウスのまわりはほとんど森で覆われている。こういったところでおこなわれている稲作である。

植付け場所は，湿地林を伐採することもあるが，多くの場合は草地を開いて準備する。元来より利用してきた草地には，高さが2mを越すシンジュガヤの一種 *Scleria sumatrensis*（カヤツリグサ科）が密においしげる。毎年4月に収穫が終わり，つぎの植付けのための準備を始めるのは8月である。そのころには背丈を越す *Scleria* が再び密生しているから，それを刃渡り1mほどの山刀をふるって刈りはらう（第1図）。2週間ほど乾かした後，火入れをしたら植付けの準備は完了である。密生した *Scleria* 草地を開くと，そこでは植付け後にでてくる雑草は少ないから，植付けは籾の散播でできる。稲が30cmほどの丈に育ったころ，生育が密なところから引き抜いた稲を疎なところへ植え込む。その作業の際，そこここに回復してきた *Scleria* を刃渡り30cmほどの山刀で刈っていく。その程度のさほど人手のかからない除草だけで収穫を迎えられる。

NII-Electronic Library Service

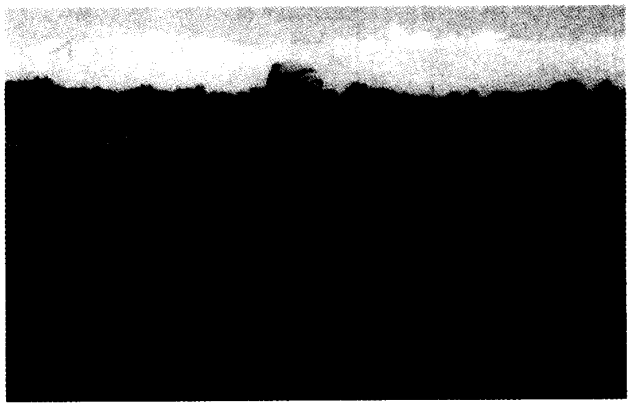
The Weed Science Society of Japan

ところが，同じ場所を3年ほど繰り返して使うと，しだいに *Scleria* 以外のやっかいな雑草が増えてくる。そうなると，十分に休閑した湿地林や *Scleria* 草地に移り，そこを開いて植付けることになる。旺盛な植生の回復を利用して，休閑により雑草の発生を抑え，移植よりもはるかに楽な散播により植付けをおこなっているのである。

じつは，近年では，ずいぶん違ったやり方もみられる。植付けのために，高さ1m弱のタイワンアシカキ *Leersia hexandra* が優占する草地を開くようになった。ここでは，まず除草剤のパラコートをまく。20リットルほどの薬剤で満たしたタンクを背負い，片手でポンプのレバーを上下させ，もう一方の手でノズルの柄をもって除草剤を散布する(第2図)。枯れたタイワンアシカキの乾燥をまって火を入れた後，植付け直前に，パラコートを枯れ残った草に再びまく。タイワンアシカキは，茎が細く柔らかいので山刀を振っても倒れるばかりで刈りにくい。さらに，回復が早いので，念を入れて除草剤を散布しないと稲が競争に負けてしまう。植付けも雑草との競争に有利なように苗の移植となり，かつてはみられなかった畑苗代が作られるようになった。サラワクでタイワンアシカキ草地が稲作に広く使われるようになったのは，パラコートが普及した1980年代以降である。ちなみに，密にしげった *Scleria* 草地で除草剤をまくのははなはだ困難だ。背丈をこす草が密生するため，散布のために草地に踏み入れるのが容易でないし，散布ノズルの柄もうまく操れない。

タイワンアシカキは，*Scleria* 草地を開き，連作がすすむとしだいにみられるようになる。連作4，5年目から徐々に増えはじめ，10年近くもするとおもにタイワンアシカキが密生する草地にかわってしまう。つまり，*Scleria* とタイワンアシカキの草地は，同じような自然環境の下にみられるのだが，人為のかかりぐあいが要因となって形成されるのである。かつては，タイワンアシカキが増えると植付け場所を移したが，パラコートの普及によって連作年数が長くなってきた。ロングハウスから近いところで定着的な稲作が好まれるようになってきたのである。

かつてのように，ロングハウスから遠い出作り小屋で，農繁期に1，2か月も寝泊りするようなことは今では稀だ。最近では，早くタイワンアシカキの草地にかわるように，その種をばらまく人もあるほどだ。山刀による草刈りよりも，除草剤をまくほうがよっぽど人手がかからないためである。



第2図 タイワンアシカキが密生する草地への除草剤パラコートの散布
1995年8月13日，マレーシア・サラワク州のバコン川流域の村にて筆者撮影。

とはいえ，*Scleria* 草地を使わなくなったわけではない。除草剤の購入費を捻出できない世帯では，*Scleria* 草地を開き稲作をしている。草地を使い分けることによって，人手のかけ方をうまく調整している例もある。植付け面積の広い世帯では，半分をタイワンアシカキ草地に開き移植し，残り半分を *Scleria* 草地に開き散播しているのだ。このことにより，植付け場所の準備には，人手かかからない除草剤散布と人手がかかる山刀での伐採を組み合わせ，植付けには，人手がかかる移植と人手がかからない散播を組み合わせている。家計や世帯の労働力の状況に応じて，植付け前の草地を柔軟に使い分ける稲作をおこなっているのである。

引用文献

1) 市川昌広2000．サラワク州イバン村落における湿地田稲作—植付け方法にみる適応戦略—．東南アジア研究38(1)，74-94．
2) 市川昌広2000．サラワク州イバン村落における移動湿地田稲作の変遷．東南アジア研究38(2)，226-248．
3) Ichikawa, M. 2003. Shifting swamp rice cultivation with broadcast seeding in Insular Southeast Asia: a survey of its distribution and the natural and social factors influencing its use. Southeast Asian Studies 41(2), 239-261.

NII-Electronic Library Service